

がする。林の奥に潜んで鳩の含み聲がホロ／＼と聞えて来る。初夏の林は静かである。

私は大きく胸を張つて林のフレッシュな大氣を吸入して歸途に着いた。歸途私は今年初めての蛇に遭つた。夢を見ただけにギョットして眼を見張つたが蛇は直ちに叢に吸はれる如く隠れて、私を追つては來なかつた。多分女神が私を可愛想に思つて蛇に追はせなかつたのだらう……。(4)——十一、五、末——

非常時に於ける吾等青年宗教家の覺悟

江 口 啓 淳

今や支那事變も忠烈なる皇軍正義の膺懲に南京陥落を第一段階とし、除州占領を第二段階として舊冬早くも「中國臨時政府」の生誕を見、今春更に「維新政府」の設立等、蔣一派存続の影は愈々薄い、其れにも拘はらず尙虚勢を張つて長期抗日を豪語しつゝある彼は、實に愚なる哀むべき存在である。

彼の赤魔の冷酷な鐵の桎梏の下に悲惨な喘ぎを續けて居る蒙昧なる支那四億民衆の爲、ひいては東洋永遠樂土建設の爲に、幾多の苦難を侵して聖戰を續け行く我が忠勇なる將兵を憶ふ時吾等青年宗教家は何を爲すべきか。聖戰に傷つきし將兵の慰問壯烈華と散りし極天護皇基りし英靈の追弔供養等、それも良からう。然し吾等本化門下にはそれ以上に重大なる使命がある。

今次事變は單に支那一國のみに關係するのではない。東亞一角での銃聲は全世界へと波紋を振動する。且つ長期抗戰に入つた今日、吾等は一大信念と覺悟とを以て之に當り立正精神の高揚に邁進しなければならぬ。立正精神とは日本國と法華經との冥合である。思ふに日本精神とは黑白明克にし慈光賓土に遍ねからざるなき太陽の德輝である。その由來する所、皇宗神武建國の昔、

上則答三乾靈授國之德一、下則弘二皇孫養正之心一、然後兼三六合以開都一、掩三八紘一而爲宇不三亦可一乎

の御詔に肇まる維神の道である。之を明治天皇は國のため仇なすあたはくたくとも

いつくしむべきことな忘れそ

と仰せられた。これを具體的に示すものは實に鏡玉劍の三種の神器である。之即ち智仁勇の三徳の表象である。然し乍ら一太陽に具する本有の三徳である。旭日一度東天に出るや乾坤忽ち明らかになり、總べては育つ。その闇黒を照破する「破闇の力」は劍となり、總べてを照す「遍照の益」は鏡に顯はれ、總べてを育ぐみ惠る「生育の德」は玉と結晶する。この太陽は單に日本のみならず世界を隈く照す太陽である。

安房に降誕せられ、忍難事勝の生涯を破邪顯正、立正安國をモットーとし國難來の皇國の爲に敢然立つた日蓮聖人は正義の爲には何物をも恐れず、執權獨り實力を振へる鎌倉幕府當時に於て執權義時に對して、その大義名分より神嚴なる筆誅を加へ

る等日本精神をいかになく發揮して居る。宗祖弘毅の生涯は又
如來の智（空座）仁（慈悲）勇（忍辱）の顯である。即ち「太
陽の子」たるを自負し理想とせられたのである。八絃一字一六
合一都の日本精神は久遠悠久の昔より盡未來際に至るまで赫々
たる太陽となつて全世界に君臨する。然かもこの太陽の三徳を
強く自己の信念とし宗教とし日本精神に生きられたのが日蓮上
人なのだ。

斯かる偉大なる宗祖を戴く吾等は宗祖の信念を吾が信念とし
宗祖の氣魄を取つて以つて吾が氣魄とし本門の題目、本尊、戒
壇の三大祕法を以て一天四海闊浮同歸の大願業に邁進しなけれ
ばならない。

我等はこの事變を契機として、渺くとも日本皇國の大使命た
る「八絃一字、六合一都」の大理想を全世界に將來する前提と
して先づ東亞の天地を寂光土化する廣大無邊なる神意の發動な
りと信解する。經曰「今正是時」と。さうだ正しく今だ。皇佛
冥合、闊浮提内廣命流布の時は實に今だ。この實際化こそ現代
青年宗教家に架せられたる一大使命なのだ。

その使命達成の爲には「我れ日本の柱、眼目、大船とならん」
の大願を奮ひ起し、併せて忍難事勝の聖人の「立正精神」を体
得發揚する時、東亞否、世界全人類永久の平和の光が輝き渡る
であらう。(3)

(完)

雨の夜更け

磯邊 涉

雨は強く降り出した。晝迄は蒸暑い曇天だったが夕方豆腐屋
のラツバが町に響いて夕餉の支度に取りかゝる頃から、降り出
した雨はもう本降りとなつて、風も加はつた。前の檐が大揺れ
に揺れ初めた。トタン屋根を打つ雨音は強く、雨水が電灯に光
つて屋根から駆け落ちる音も騒々しい。窓の隙間漏る雨風！
それも不氣味である。私は虫の性か今晚に限つて強く泣き喚く
二つの妹を背負つて玄關を出た。子守の爲である。父母は止め
たが泣き喚く妹を見ては黙しては居られぬ。表は篠突く雨で、
兩足が白く地に躍る。空は雨が風に霧の様に吹き飛ばされて居
る。私は着物を上げ、飛ばされさうな傘を手に流れ行く泥水を
ビシヤビシヤと歩いた。妹はすぐに泣き止んだ。

暗い街燈の下を行くと海へ出る。眞黒な魔物とも思はれる波
浪の打寄せも物凄く海は猛り狂ふ。傘も吹飛ばさん程の風に獅
噛付く様にして泥濘道をさけ歩き乍ら、妹が濡れはせんかと氣
遣つた。遠く闇黒色の海の彼方の明滅の灯は燈台か漁火か。燈
を流した沖は灯の他何一つなく自然の荒れる儘である。時折ト
ドツと打ち揚げる怒濤。私は急いで町の通りへと向つた。追ひ
立てる様な怒濤と雨と風である。

街燈の薄暗い途を行くとホテルへ出る。灯とネオンの光が闇